

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ*

島 久 洋

世界はすべてお芝居だ。

男と女，とりどりに，すべて役者にすぎぬのだ。
登場してみたり，退場してみたり，
男一人の人生の，そのさまざまな役どころ，
幕は，七つの時期になる。まずは赤ん坊，

(中 略)

さて第六期となれば，
ひよろひよろの，スリッパはいた間抜け爺^{じい}，
鼻には眼鏡，腰には財布，
よくぞ蔵^{しま}っておったのは，若い時分の長靴下，
ちぢんだ脛には，大きすぎ，雄々しい昔の大声も，
またもや子供の甲声^{かんこえ}で，笛ふくように
ぴいぴい，ぴゅうぴゅう鳴るばかり。さて大詰め的一场，

*本報告は，1990年7月下旬からおよそ1ヶ月間にわたる家森幸男教授（島根医大，現京大）の WHO CARDIAC study 国際共同研究ブラジル調査団に同行し，実施した調査に基づいている。同教授と奈良安雄博士にはとりわけお世話になった。

また，ブラジルでの現地調査では，南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所長森口幸雄教授に大変お世話になった。ここに記して感謝する。なお，本報告の資料の整理に際して，平成4年度文部省科学研究費補助金総合研究A（現代青年の価値観と行動様式，課題番号04301010，代表者 秋葉英則）の援助を受けた。

キーワード：加齢，老齡期のイメージ，戦後日系ブラジル移民，高齢化社会

この奇しき波瀾の一代記と大団円と申すのは、
第二の^{みどりご}嬰兒，それからまったくの暗転，
齒なく，眼なく，味覚なく，何もない。

『お気に召すまま』第2幕・第7場

シェークスピア，阿倍知二訳，筑摩書房

“老い”を明確に定義することは容易ではない。老いが互いに他に還元できない多種多様の相貌をもつことを認めざるをえない。ところで，“老い”には，生物学的また民族学的に，そして歴史的また社会的に，両極端なイメージが同居している。「温和な」と「気むずかしい」，「豊饒な」と「縮まり干からび皺だらけ」，「尊敬」と「軽蔑」，「自由と閑暇の時期」と「廃物の時期」等々である。ただし，これらのイメージは，往々にして他から付与されたものであり，必ずしも“老いの時期”の人々がみずからもっているイメージでは決してないのである（Simone de Beauvoir, 1970）。

“老い”のイメージそのものも多種多様であり，各世代により異なるのは言うまでもないが，同じ世代の人々のあいだでも種々様々であろう。この場合のイメージという語は，かなり常識的な意味であり，人々が特定の対象や事象または概念についていただいている漠然とした過去から現在にわたる経験や印象の全体をさすのである。

“老い”のイメージの研究は，高齢化社会を迎えた現在では，理論的にも実際的にもとりわけ重要である。その際，老人自身がみずからに対して持っているイメージの研究が必要なのはもちろん，それに劣らずこれから老いを迎えようとする人々がもつイメージの研究もまた大切である。

これから老年期を迎えようとしている人々はどのような老いのイメージをもっているのだろうか。本研究に先立つ研究として，日本よりもはるかに平均寿命が短いブラジルの人々の老いのイメージを調査し報告した（島，1991）。それは，ブラジル最南端のリオグランデ・ド・スル（Rio Grande de Sul）州のバジェ（Bagé）市における50歳代前半の中年男女の老いのイメージの

調査報告であった。

南リオグランデ・カトリック総合大学 (Pontificia Unisersidate Católica do Rio Grande de Sul) の老年医学研究所の所長森口幸雄教授によれば、同州の平均寿命は男性が67歳、女性が70歳であり、ブラジルの中ではもっとも平均寿命の長い州である。なお、ブラジル全土の正確な平均寿命の調査は無いが、60歳半ばを超えることはないだろうということであった(森口, 1990)。

ブラジルの“老い”のイメージの調査結果は、全体的に考えると、落ち着いており、明るく受容的で積極的であると言える(島, 1991)。

日本の場合、女性82.11歳、そして男性76.11歳の平均寿命であり、男女とも世界最長寿国である(朝日新聞, 1992)。日本での高齢期について種々の側面についての総理府の調査によれば、全国の30歳以上の5千人を対象にしてなされた高齢期のイメージは、「社会の第一線から退いて趣味などにより余生を過ごす」(39.6%) がもっとも多く、次いで、「『高齢期』といって一括りにすることなく、できる限り仕事を続ける」(34.2%)、『第2の人生』、『第3の人生』として新しいことに取り組む」(32.2%)の順である(週刊医学界新聞, 1990)。

日本の平均寿命よりも約17年早く死ぬ戦後ブラジル移民の日系人(島, 1992, p.46)はどのような“老い”のイメージを持っているのであろうか。本報告は、戦後ブラジル移民の日系人を対象にして“老い”の種々相について調査し、結果を総理府の調査と比較検討したものである。

方 法

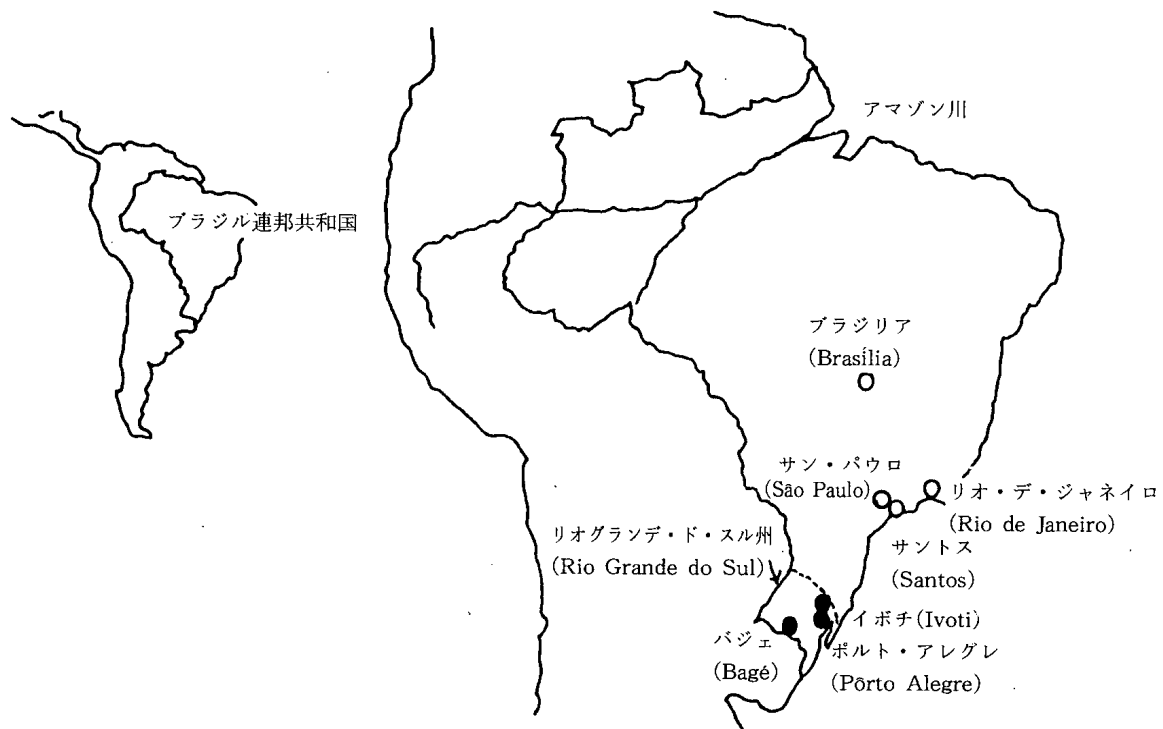
調査地域

日系移民の調査実施地域は、図1に示す三地域であり、すべてリオグランデ・ド・スル州内にある。

同州の南端、ウルグァイとの国境近くのバジェ (Bagé) 市、ポルト・ア

レグレ (Pôrto Alegre) のすぐ北にあるイボチ (Ivoti) の日本人コロニー、そしてリオグランデ・ド・スル州の州都ポルト・アレグレ市である。

具体的な調査実施場所は、バジェが市立体育館、イボチの日本人コロニーがイボチ日伯文化体育協会会館、そしてポルト・アレグレが日本人会館であり、調査対象者は各場所へ来訪し面接調査を受けた。一部は、各家庭へ訪問し調査した。



注：●印の3地域で実施調査を行った

図1 ブラジル連邦共和国の地図

調査対象

バジェ市在住の日本人15家族のうち、11家族は夫か妻のどちらかが日本へ出稼ぎ中であり、調査できた人数は、男性4名と女性1名の計5名にすぎなかった。この人々はすべて戦後移民である。

イボチの日本人コロニーで42名、ポルト・アレグレで53名の人々を調査した。ただし、この中には数名の戦前移民が含まれていたもので、調査できた戦

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

後移民は、表1に示すように、イボチで男性21名と女性17名の計38名であり、

表1 調査対象者の年齢

		男 性	女 性	計
ポルト・アレグレ	人 数	19	27	46
	平均年齢	59.95	61.00	60.57
	標準偏差	11.21	11.72	11.40
	年 齢 幅	47歳－78歳	41歳－79歳	41歳－79歳
イ ボ チ	人 数	21	17	38
	平均年齢	56.43	52.59	54.71
	標準偏差	10.67	11.67	11.14
	年 齢 幅	39歳－78歳	34歳－71歳	34歳－78歳
バ ジ エ	人 数	4	1	5
	平均年齢	54.25	53.00	54.00
	標準偏差	7.37	—	6.40
	年 齢 幅	45歳－63歳	—	45歳－63歳
計	人 数	44	45	89
	平均年齢	57.75	57.64	57.70
	標準偏差	10.65	12.16	11.38
	年 齢 幅	39歳－78歳	34歳－79歳	34歳－79歳

ポルト・アレグレで男性19名と女性27名の計46名であった。三地域の総計は男性44名と女性45名の計89名である。

また、移民二世も除いた。

調査時期

バジェ市では、1990年8月2日から同年8月6日までの6日間、イボチの日本人コロニーは同年8月9日の1日、そしてポルト・アレグレ市では、同年8月10日から14日までの5日間、それぞれ各地に滞在し、それぞれの場所で面接調査を行った。

調査分析項目

質問項目は全部で72項目であるが、ここでは本報告で分析した項目のみを

記す。

また、以下に記述する質問項目は、必ずしも質問紙の項目番号順ではないことを断っておく。

まず、フェース・シートで、氏名、移住地名、居住地域、性別、そして生年月日を聞いた。

Q 1. あなたの職業は何ですか。

1. 農業 2. 商業 3. サラリーマン ()
4. その他 ()

Q2. あなたはどこで生まれましたか。

1. 日本 2. ブラジル
3. その他（ ）

Q 3. あなたは日本に住んでいたことがありますか。

1. はい 2. いいえ

Q 3-1. “はい”と答えた人は、何歳の時から何年間ですか。

() 歳から () 年間。

Q 3-2. “はい”と答えた人は、
何県ですか（二つ以上の場合もすべて答えて下さい）。

(, , ,) 県 (市・町)

Q 4. あなたはブラジルに何年間、住んでいますか。

() 年間。

Q 5. あなたは、ご自分の高齢期について考えたことがありますか。

1. よく考えている 2. ときどき考えている
3. どちらとも言えない 4. あまり考えたことがない
5. 全く考えたことがない
6. その他（ ）

Q5-1. 1から2に○印をつけた人すなわち“考えている”と答えた人は、その内容を次にあげる項目の中から、あなたの考えにもっとも

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

近いものを1つ選んで○印をつけて下さい。

1. 自分の健康や医療、介護に関すること。
2. 年金や老後の蓄えに関すること。
3. 家族との同居に関すること。
4. 物価の動向など経済状態に関すること。
5. 余暇活動や社会参加活動に関すること。
6. 住宅や生活環境に関すること。
7. 就業に関すること。
8. 子供の将来に関すること。
9. その他（ ）

Q 6. あなたは、高齢期の夫妻の生活をどのように過ごしたらよいと思いますか。次のどれか1つを選んで○印をつけて下さい。

1. お互いの生活を尊重しつつ、夫婦一緒に過ごす時間を持つ。
2. できるだけ夫婦一緒に過ごす時間を持つ。
3. お互いの生活を尊重し、できるだけ独立した時間を持つ。
4. その他（ ）

Q 7. あなたは、高齢期における子供との関係をどのようにすべきだと思いますか。どれか1つを選んで○印をつけて下さい。

1. 子供の独立した生活を尊重するが、お互いに困ったときには助け合うなど、親子のきずなはしっかり結ぶようにする。
2. 一つの家族として、生活を共にする。
3. 子供は子供、親は親で、お互いの生活には干渉せず、体が不自由になったりしても、子供に迷惑をかけないようにする。
4. その他（ ）

Q 8. あなたは、老後をどこで過ごしたいですか。

1. ブラジル 2. 日本 3. その他（ ）

Q 8-1. その理由を書いて下さい。（ ）

Q 9. あなたは、高齢期という言葉からどんなイメージを感じますか。次にあげてある項目のうち、あなたの考えにもっとも近いものを1つ選んで○印をつけて下さい。

1. 社会の第一線から退いて趣味などにより余生を過ごす。
2. 『高齢期』といって一括りにすることなく、できる限り仕事を続ける。
3. 『第二の人生』、『第三の人生』として新しいことに取り組む。
4. 自分の子や孫などの若い世代に、自分の経験を伝える。
5. 伝統的な生活を守っている。
6. 世俗的なことから離れている。
7. 保護されるべき社会的弱者。
8. その他（ ）

調査手続

日本で作成した質問紙の原案を、ポルト・アレグレに到着後、森口教授および移民二世でブラジル生まれの教授夫人森口カオル女史と検討し、部分的に修正した質問紙に基づいて面接調査を実施した。

まず、質問項目および質問の意図を、日本から同行した数名の調査団員に詳しく説明した。三地域での調査は、団員数名が中心となって面接を行い、回答事項を質問紙に記入した。筆者は面接中、常に立会い、面接終了後、質問紙を点検して不備な点があれば、筆者が補足面接を行った。また、面接時間は、約30分から1時間位のあいだである。

結 果

まず、戦後移民の弁別を行う。生年月日とQ2, Q3, そしてQ4の3つの質問により、戦前移民、戦後移民、あるいは移民二世かを区別した。

次いで、Q4の結果に基づいて戦後移民のブラジル在住年数を整理したの

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

が、表2である。リオグランデ・ド・スル州の戦後移民は、1953（昭和28）

表2 性別と地方別のブラジル在住数（Q4）

		男 性	女 性	計
ポルト・アレグレ	人 数	19	25 *	44
	平均年数	29.74	30.16	29.98
	標準偏差	2.45	3.01	2.76
	年 数 幅	23年－34年	22年－37年	22年－37年
イボチ	人 数	21	17	38
	平均年数	29.14	27.82	28.55
	標準偏差	4.45	7.39	5.90
	年 数 幅	20年－35年	13年－35年	13年－35年
バジェ	人 数	4	1	5
	平均年数	29.00	29.00	29.00
	標準偏差	0	—	0
	年 数 幅	—	—	—
計	人 数	44	43	87
	平均年数	29.39	29.21	29.30
	標準偏差	3.44	5.23	4.39
	年 数 幅	20年－35年	13年－37年	13年－37年

* ポルト・アレグレの女性27名のうち2名が無回答なので回答者数は25名。

年から始まっているので、最長のブラジル在住年数は、1990年の調査時点で37年である。

ポルト・アレグレの平均在住年数は、男女ともほぼ30年であり、イボチのそれは、男性が29年、女性が28年であり、バジェはすべてちょうど29年である。三地域とも平均在住年数は約30年である。

性別と地方別の職業分類表を示したのが、表3である。全体的にみると、やはり農業が多い。イボチとバジェは圧倒的に農業が多いけれども、ポルト・アレグレは人口約120万人の大都会だけあって他の二地域と多少異なった職業構成を示している。

バジェは、今回調査できなかった人々を含めて、すべて長崎県壱岐島出身者であり、農業を営んでいるけれども、市内に店を構えて野菜果物商を兼業

表3 性別と地方別の職業（Q1）

	ポルト・アレグレ			イボチ			バジェ			合計
	男	性	女	性	計	男	性	女	性	計
農 業	11 (57.9)	7 (25.9)	18 (39.1)	21 (100)	15 (88.2)	36 (94.7)	4 (100)		4 (80.0)	58 (65.2)
商 業	3 (15.8)		3 (6.5)					1 (100)	1 (20.0)	4 (4.5)
サラリーマン	2 (10.5)	3** (11.1)	5 (10.9)		1 (5.9)	1 (2.6)				6 (6.7)
主 婦		14 (51.9)	14 (30.4)		1 (5.9)	1 (2.6)				15 (16.9)
そ の 他	2* (10.5)	3*** (11.1)	5 (10.9)							5 (5.6)
無 回 答	1 (5.3)		1 (2.2)							1 (1.1)
計	19 (100)	27 (100)	46 (100)	21 (100)	17 (100)	38 (100)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	89 (100)

注：数字は人数，（ ）内の数は性別，地方毎の％を表す。

*弁護士とマッサージ師。**洗濯屋勤務1名と事務員1名を含む。***日本語教師2名と大学教員1名。

して主に自分の栽培した作物を売っている人々もいる。男性の1名は，農業と八百屋の兼業である。商業の女性は，夫の農地で栽培された野菜を店で売っているのである。

イボチの日本人コロニーは，主に果樹園経営の農家のあつまりであり，中心作物はブドウである。サラリーマンおよび主婦と答えた女性それぞれ1名を除き，他はすべて果樹園農家である。

ポルト・アレグレでは，男性の6割弱が農民であり，商業3名，サラリーマン2名，そして，その他が2名であった。その他の2名は，弁護士とマッサージ師である。一方，女性の5割強が専業主婦であり，クリーニング店勤務1名と事務員1名との2名を含む3名が商業，日本語教師2名と大学教員1名とのその他が3名，残り7名が農業である。農業の7名は女性の約1/4を占めていた。

三地域に共通している特徴は，ポルト・アレグレでの少数の知的職業以外は，農業と主婦を中心とする肉体労働に従事しているか従事していたことである。

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

現在年齢的に、5, 60歳代になっている戦後移民は、ブラジル在住期間も約30年位になるが、彼らは現在、自分達の老後のことをどう考えているのであろうか。

自分の高齢期について考えたことがあるか否かという質問（Q5）についての回答結果を表4に示す。三地域の回答内容が類似していたことと回答者

表4 自分の年とった時期について（Q5）

項 目	男 性	女 性	計
1. よく考えている	15 (34.1)	16 (35.6)	31 (34.8)
2. ときどき考えている	19 (43.2)	19 (42.2)	38 (42.7)
3. どちらとも言えない	2 (4.5)	1 (2.2)	3 (3.4)
4. あまり考えたことがない	5 (11.4)	6 (13.3)	11 (12.4)
5. 全く考えたことがない	0 (0)	1 (2.2)	1 (1.1)
6. そ の 他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
無 回 答 者	3 (6.8)	2 (4.4)	5 (5.6)
計	44 (100)	45 (100)	89 (100)

注：数値は人数，（ ）内の数は％

数が少数であったことが理由で三地域の回答を込みにして性別のみで結果を示したのが表4である。

「よく考えている」と「ときどき考えている」とを加えた人数は、男性で34名（77.3%），女性で35名（77.8%），計69名（77.5%）である。男女とも8割弱の人々がやはり考えているのである。

この結果は、日本の調査結果と非常に類似している。総理府の調査では、“自分の高齢期の生活”について考えている人々は50歳代の人々がもっとも多く、78.5%であり、ブラジル日系戦後移民の人々よりも1%多いだけなのである。戦後移民して30年位ブラジルに居住している人々も日本に残って生

活している人々と同じように8割弱の人々が自分の老後について考えているのである。この数字は、ブラジル人の4割を倍近くも上回っているのである（島，1991，p.50）。

次に、高齢期について考えている人は、どんなことを考えているかについて聞いた。これは1つだけ選んで回答してもらう質問であるが、多項目に回答した人も複数あったのでそれらも含めて結果を整理した。男性34名、女性35名、計69名の考えている内容の回答結果を表5に示す。ただし、女性35名のうち、4名が無回答者であったので、男性34名と女性31名の計65名の回答者であり、男女各々2名ずつの複数回答があったので回答頻数は人数を上まわっている。

男性と女性を比べれば、若干の違いが認められる。

男女を込みにして、もっとも多いのが「自分の健康や医療、介護」であり、男性44.7%，女性44.1%，計44.4%である。次いで「年金や老後の蓄え」であり、男性21.1%，女性14.7%，計18.1%である。これら二項目は男女で共通しているが、3番目以降の順位に違いが認められる。

男性が、「物価の動向など経済状態」（13.2%）、「住宅や生活環境」（7.9%）、「子供の将来」（7.9%）、「余暇活動や社会参加活動」（5.3%）の順であるのに対して、女性では、「家族との同居」（14.7%）「物価の動向など経済状態」（8.8%）、「子供の将来」（8.8%）、「余暇活動や社会参加活動」（5.9%）、「住宅や生活環境」（2.9%）の順である。

女性が「家族との同居」を14.7%もあげていたのに対して、男性が一人もあげていなかったことは注目に値する。次いで、「年金や老後の蓄え」を男性が21.1%もあげていたのに対して、女性の割合はかなり減少して14.7%であったことも注目すべき相違点であった。

また、「就業」を男女とも一人もあげていなかったのは、彼らの大部分が農業に従事する農民であったからだと考えられる。

総理府の調査結果では、ブラジル日系人と同様に「自分の健康や医療、介護」が81.1%を占めており、次いで「年金や老後の蓄え」が70.1%と圧倒的

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

表5 考えている内容 (Q5-1)

項 目	男 性	女 性	計
1. 自分の健康や医療, 介護について	17 (44.7)	15 (44.1)	32 (44.4)
2. 年金や老後の蓄えについて	8 (21.1)	5 (14.7)	13 (18.1)
3. 家族との同居について	0 (0)	5 (14.7)	5 (6.9)
4. 物価の動向など経済状態について	5 (13.2)	3 (8.8)	8 (11.1)
5. 余暇活動や社会参加活動について	2 (5.3)	2 (5.9)	4 (5.6)
6. 住宅や生活環境について	3 (7.9)	1 (2.9)	4 (5.6)
7. 就業について	0 (0)	0 (0)	0 (0)
8. 子供の将来について	3 (7.9)	3 (8.8)	6 (8.3)
9. そ の 他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	38 (100)	34 (100)	72 (100)

注：数値は頻度，() 内の数は%，男性の回答者34名，女性の回答者31名，無回答者4名，計65名の回答者数であり，男，女それぞれ2名の複数回答者があり，他はすべて1つだけの回答である。

に多く，次いで，「家族との同居」(25.9%)，「物価の動向など経済状態」(21.0%)と順次低くなっている。これらの結果は，総理府の回答が3つまで回答するように教示してあったのに対して，我々の回答は，もっとも自分の考えに近いものをただ1つだけ選択して回答するように求めるという回答様式の違いも大きく影響しているものと考えられる。「健康」と「生活のための蓄え」ということは，日本とブラジルに住む日本人にとってはもっとも重要な関心事というよりも心配の種であると言って間違いなからう。

次に，高齢期の夫婦の生活について彼らはどのように考えているのであろうか。Q6の回答結果を整理したものが表6である。表6に示すように，男女とも同じような傾向を示しており，「お互いの生活を尊重しつつ，夫婦一緒に過ごす時間を持つ」という項目がもっとも多く，男性59.1%，女性48.9%

表 6 高齢期の夫婦の生活の過ごし方 (Q 6)

項 目	男 性	女 性	計
1. お互いの生活を尊重しつつ、夫婦一緒に過ごす時間を持つ	26 (59.1)	22 (48.9)	48 (53.9)
2. できるだけ夫婦一緒に過ごす時間を持つ	8 (18.2)	7 (15.6)	15 (16.9)
3. お互いの生活を尊重しつつ、できるだけ独立した時間を持つ	6 (13.6)	4 (8.9)	10 (11.2)
4. そ の 他	0 (0)	1 (2.2)	1 (1.1)
無 回 答 者	4 (9.1)	11 (24.4)	15 (16.9)
計	44 (100)	45 (100)	89 (100)

注：数値は人数，() 内の数は％，女性 1 人の「4. その他」の内容は，「1 人暮らしなので子供達にできるだけ世話をかけないようにしている」。

で計 53.9％である。次いで「できるだけ夫婦一緒に過ごす時間を持つ」が男性 18.2％，女性 15.6％で計 16.9％であり，最後が「お互いの生活を尊重しつつ，できるだけ独立した時間を持つ」が男性 13.6％，女性 8.9％の計 11.2％である。その他の女性 1 名は，次のような回答であった。1 人暮らしなので，子供達にできるだけ世話をかけないようにしている。

総理府の日本での調査結果と比較すると，「できるだけ夫婦一緒に過ごす時間を持つ」という項目の割合が多少減っていること以外は，両者の結果はかなり類似した傾向を示していた。

すなわち，総理府の結果は，「お互いの生活を尊重しつつ，夫婦一緒に過ごす時間を持つ」が 50.8％，「できるだけ夫婦一緒に過ごす時間を持つ」が 29.9％，「お互いの生活を尊重しつつ，できるだけ独立した時間を持つ」が 13.1％をそれぞれ占めていた。これらの傾向は，日系ブラジル人の場合，男性の方が女性よりも若干その割合が多いのが目につくのである。

次に，高齢期における子供との関係について聞いた (Q 7) 結果を整理したのが表 7 である。

「子供の独立した生活を尊重するが，お互いに困った時には助け合うなど，

表7 高齢期における子供との関係 (Q7)

項 目	男 性	女 性	計
1. 子供の独立した生活を尊重するが、お互いに困った時には助け合うなど、親子のきずなはしっかり結ぶようにする	32 (72.7)	35 (77.8)	67 (75.3)
2. 一つの家族として、生活を共にする	1 (2.3)	0 (0)	1 (1.1)
3. 子供は子供、親は親で、お互いの生活には干渉せず、体が不自由になったりしても、子供に迷惑をかけないようにする	7 (15.9)	4 (8.9)	11 (12.4)
4. そ の 他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
無 回 答 者	4 (9.1)	6 (13.3)	10 (11.2)
計	44 (100)	45 (100)	89 (100)

注：数値は人数，（ ）内の数は％

親子のきずなはしっかり結ぶようにする」は男性が72.7％であり、女性が77.8％であり、計75.3％であった。ほとんどの人がこの項目を選んでいて、次いで、「子供は子供、親は親、お互いの生活には干渉せず、体が不自由になったりしても、子供に迷惑をかけないようにする」が、男性15.9％、女性8.9％で計12.4％であった。

「一つの家族として、生活を共にする」という日本の伝統的な考え方は、さすがにほとんど選んでいなくて、男性がただ一人だけであった。男性で2.3％、合計で1.1％である。ブラジル文化の中ではさすがにこのような考え方は忘れ去られてしまうのであろう。

日本での総理府の調査結果で、もっとも多く選ばれたのは、「子供の独立した生活を尊重するが、お互いに困った時には助け合うなど、親子のきずなはしっかり結ぶようにする」を選んだ者の割合は60.0％であり、日系ブラジル人の75.3％と比較すれば、15％位減少している。次いで、「一つの家族と

して、生活を共にする」(20.8%)、「子供は子供、親は親で、お互いの生活には干渉せず、体が不自由になったりしても、子供に迷惑をかけないようにする」(14.9%)の順である。

日系ブラジル人と日本在住の日本人との結果を比較すれば、日本在住の日本人は「一つの家族として、生活を共にする」という項目を2割強の人々が選んでおり、高年齢になるほど高くなっているのに対して、日系ブラジル人は男性がただ一人だけしか選んでいなかったことがもっとも大きな違いである。三世代同居などは、頭から消え去っているのであろうか。決してそうではない。例えば、イボチの果樹園経営の農家などは三世代同居、四世代同居が決して珍しい現象ではないのである。ただし、同居していても、無条件に「一つの家族として、生活を共にする」と考えているのではなくて、むしろ「子供の独立した生活を尊重するが、お互いに困ったときには助け合うなど、親子のきずなはしっかりと結ぶようにする」という考えに基づいて三世代、四世代同居をしているのであらうと推察されるのである。

戦前の旧民法に基づく親子同居の精神的風土はブラジルでは存在せず、別の相互扶助精神に基づいた三、四世代同居が成立していると考えられるのである。ブラジルの明るさに裏打ちされたものであらう。

次に、高齢期という言葉から感じるイメージについての回答を先に整理することにしよう。回答は自分の考えにもっとも近いものを1つ選ぶようになっているけれども、数名の人々が二つ以上を選んでいった。二つ以上選んだ人はそれらも含めて回答を整理した。表8は、そのようにして整理した高齢期についてのイメージの結果である。

男女ともに、『高齢期』といって一括りにすることなく、できる限り仕事を続けるという項目がもっとも多く、男性52.9%、女性53.8%であり、計53.4%であった。これは、彼らが農業に従事しているという職業によるところ大であらう。定年というものが無いからでもあらう。

二番目以下の選択数に男女の違いがみられるのである。男性では、二番目に多いのが、「社会の第一線から退いて趣味などにより余生を過ごす」が21.6

表8 高齢期についてのイメージ (Q9)

項 目	男 性	女 性	計
1. 社会の第一線から退いて趣味などにより余生を過ごす	11 (21.6)	7 (13.5)	18 (17.5)
2. 『高年齢』といって一括りにすることなく、できる限り仕事を続ける	27 (52.9)	28 (53.8)	55 (53.4)
3. 『第二の人生』、『第三の人生』として新しいことに取り組む	2 (3.9)	3 (5.8)	5 (4.9)
4. 自分の子や孫などの若い世代に、自分の経験を伝える	7 (13.7)	11 (21.2)	18 (17.5)
5. 伝統的な生活を守っている	3 (5.9)	2 (3.8)	5 (4.9)
6. 世俗的なことから離れている	0 (0)	0 (0)	0 (0)
7. 保護されるべき社会的弱者	1 (2.0)	0 (0)	1 (1.0)
8. そ の 他	0 (0)	1 (1.9)	1 (1.0)
計	51 (100)	52 (100)	103 (100)

注：数値は頻度，（ ）内の数は％，男性の回答者42名，無回答者2名。女性の回答者40名，無回答者5名。女性1名の「8. その他」の内容，「淋しい気がする。自分と関係ないと思う。(69歳)」

％であるのに対して，女性は13.5％で三番目に多い選択である。逆に男性が三番目に多かった「自分の子や孫などの若い世代に自分の経験を伝える」は，13.7％であったのに，女性では21.2％であり，逆に二番目に多い選択数であった。

男性と女性では二番目と三番目とが互いに逆転していたのである。

男性の四番目以下は，「伝統的な生活を守っている」が5.9％，「『第二の人生』、『第三の人生』として新しいことに取り組む」が3.9％，「保護されるべき社会的弱者」が2％であり，それぞれ，四，五，六番目であった。

同じく女性の四番目以下も男性同様に頻度が少なくなり，「『第二の人生』、『第三の人生』として新しいことに取り組む」が5.8％，「伝統的な生活を守っている」が3.8％，「その他」(淋しい気がする。自分と関係ないと思う)が1.9％であり，それぞれ四，五，六番目であった。

戦後ブラジル移民の日系人の老いのイメージは、男女とも『高年齢』と
いって一括りにすることなく、できる限り仕事を続ける」ということであり、
共に5割を越えていた。次いで「社会の第一線から退いて趣味などにより余
生を過ごす」が男性21.6%で二番目、女性13.5%で三番目であり、「自分の
子や孫などの若い世代に、自分の経験を伝える」が男性13.7%、女性21.2%
であり、それぞれ三番目と二番目であった。

他は、ほんの少数であり、「世俗的なことから離れている」は誰からも選
ばれなかった。

日本国内の総理府の調査では、次の三つが三割を越えていた。すなわち、
「社会の第一線から退いて趣味などにより余生を過ごす」が39.6%、『高齡
期』といて一括りにすることなく、できる限り仕事を続ける」が34.2%、
そして『第二の人生』、『第三の人生』として新しいことに取り組む」が
32.2%であった。また「自分の子や孫などの若い世代に、自分の経験を伝え
る」は23.9%であり、ほぼ3割近かった。また、他の項目は選択数が低くなっ
ている。すなわち、「伝統的な生活を守っている」が5.5%、「世俗的なこと
から離れている」が5.7%、そして、「保護されるべき社会的弱者」は15.4%
であった。

結論として、日本国内では“高齡期は余生”というイメージが四割近くを
占めていたのに対して、戦後ブラジル移民の日系人のイメージは“できる限
り仕事を続ける”が五割を越えていたのである。

なお、日本国内でも、自営業者や家族従業者では、『高齡期』といて一
括りにすることなく、できる限り仕事を続ける」や「自分の子や孫などの若
い世代に、自分の経験を伝える」をあげた者の割合が高くなっているという
結果は、日系ブラジル人の選択と類似した結果を示していたのである。

本調査の回答肢の選択数は1つであり、総理府の調査では、2肢選択であ
るので、回答方法に違いが認められる由に直接の比較はできないが、参考ま
でに日本国内での調査結果と比較すれば、上記のような違いが認められたの
である。

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

日本国内と日系ブラジル人とを比較すれば、日本国内在住日本人は“高齢期は余生”であり、戦後移民の日系ブラジル人は“年とった時期も仕事”である。またこれは、日系人以外のブラジル人のイメージでもある（島，1991，pp.49-50）

最後にQ 8 の質問を整理することにしよう。“あなたは、老後をどこで過ごしたいですか”という質問に対する回答を整理したのが表 9 である。

表 9 老後をどこで過ごしたいか（Q 8）

場 所	男 性	女 性	計
1. ブラジル	33 (75.0)	36 (80.0)	69 (77.5)
2. 日 本	6 (13.6)	5 (11.1)	11 (12.4)
3. そ の 他	1 (2.3)	0 (0)	1 (1.1)
無 回 答 者	4 (9.1)	4 (8.9)	8 (9.0)
計	44 (100)	45 (100)	89 (100)

注：数値は人数，（ ）内の数は％

男女ともに圧倒的にブラジルで老後を過ごしたいと考えている人々が多い。男性の75％，女性の80％であり，計77.5％になる。女性の方が男性より5％多い。反対に，日本で老後を過ごしたいと考えている人々は，男性が13.6％であり，女性が11.1％であり，計12.4％である。男性の方が女性よりも2.5％多く日本で過ごしたいと考えている。また，その他は，男性が1名いた。無回答者は男女ともそれぞれ4名ずつである。

それでは，次のその理由を聞いた8-1の回答を整理してみよう。ブラジルで老後を過ごしたいと考えている人の理由は，ほぼ四つに分類できる。住めば都という言葉に代表される「環境への慣れ」，ブラジル社会の「人間関係の気楽さ」，「気候・風土のよさ」，そして「親族の存在」である。ブラジルで老後を過ごしたいと考えている人の理由はこの4次元に分けて，整理した表が表10である。

表10 ブラジルと日本で老後を過ごしたいという理由 (Q8-1)

	男性の回答内容			女性の回答内容		
	次元別内容	小計	無回答者	次元別内容	小計	無回答者
ブラジルで老後を過ごす	環境への慣れ	<ul style="list-style-type: none"> ●住めば都 1 ●日本を離れて長いから 1 ●ブラジルをおいてどこへいくんじゃ 1 ●ブラジルの生活に慣れている 1 ●環境は慣れた所が一番住みやすい 1 ●ブラジルに慣れたせい 1 か他の環境は合わない	6	環境への慣れ	<ul style="list-style-type: none"> ●ブラジルの生活に慣れているから 1 ●ブラジルに移住して以来 1 築いた歴史があるから	2
	人間関係の気楽さ	<ul style="list-style-type: none"> ●隣人を考えないですむから 1 ●日本はあまり小さいことにこだわり過ぎる, そして狭苦しい 1 ●気楽 1 ●暮らしやすい 1 ●世間を気にしないから 1 ●住みよい 1 ●のんびりしている 2 	8	人間関係・風土	<ul style="list-style-type: none"> ●住みよいから 4 ●食事がもう日本のあっさりしたもの合わない 1 ●のんびりしていて過ごしやすい 1 ●ブラジルは気候もよし 1 住みよいし, 子供もブラジルにいるので家族と一緒にいることが一番	7
	風土	<ul style="list-style-type: none"> ●温暖な気候が好きだから 1 ●静かでよい 1 	2	親族の存在	<ul style="list-style-type: none"> ●子供がいるので一緒に暮らしたい 12 ●子供との行き来がしやすいから 1 ●ブラジル生まれの二人の娘が多分当地で結婚し生活すると思いますので一緒につかず離れずで生活したいと思います 1 ●ブラジルに家族がいるので 1 ●子供がいる, だんなの墓がある 1 ●主人の墓があり, 自分もそこに骨をうめるつもり 1 ●日本へ帰りたいが高齢 (79歳) のため無理 1 	18
	親族の存在	<ul style="list-style-type: none"> ●子供達が日系二世で兄弟がブラジルにいるので, 土地もあるので 1 ●息子がいるので 1 ●ブラジルに土, 子供, 自分の最愛の家族がいるので 1 ●子供と生活を共にするから 1 ●家があるから 1 	5			
日本で老後を過ごす	<ul style="list-style-type: none"> ●日本人 1 ●自分の生まれた国だから 1 ●兄弟がいるから 1 ●日本とブラジルを行ったり来たりしたい 1 ●安心して暮らせると思う 1 	5	1	<ul style="list-style-type: none"> ●日本人だから 1 ●なつかしい 1 ●言葉の関係で病気になった時の事を思い, いますぐ日本で老後を過ごせたらと思います 1 ●意志の疎通が出来て日常生活が心配ない 1 	4	1
その他	●老後はどこでとは考えていない	1	0			

注: 数値は人数。

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

ブラジルで老後を過ごしたいと考えている男性33名のうち21名が、女性36名のうち27名がそれぞれ理由を書いていた。男性21名の理由は、住めば都という環境への慣れや順応が6名、ブラジル社会の人間関係の気楽さをあげている人が8名、気候風土の良さをあげている人が2名、そして日系二世である子供など親族の存在をあげている人が5名であった。他方、女性は、子供と一緒に住みたいという理由がほとんどである親族の存在をあげている人が圧倒的に多く18名であり、次が人間関係の気楽さや気候風土の良さを7名があげており、環境への慣れをあげている人は2名であった。

日本で老後を過ごしたいという理由は男5名と女4名であったので、表10にそのまま記入しておいたけれども、男女とも「日本人だから」という理由や「なつかしい」、「兄弟がいるから」という理由が大半であったけれども、男性の1名が「安心して暮らせると思う」という理由をあげていたのと、移住後30年を経過した現在もポルトガル語が十分に話せない女性が「言葉の関係で病気になった時の事を思いますと日本で老後を過ごせたらと思います」と答えていたのと、「意志の疎通が出来て日常生活が心配ない」と答えていたのが印象に残っている。

ブラジルで老後を過ごしたいと考えている人々のうち男性が、その理由として、「環境への慣れ」とブラジル社会の「人間関係の気楽さ、良さ」とを大半があげていたのに対し、女性は、日系二世である子供と一緒に暮らしたいとか子供がいるからという「親族の存在」を大多数の人があげていたのが対照的であった。

考 察

ブラジルへ移住して30年を経過した戦後移民の日系ブラジル人の人々の“老い”の諸側面を調査したのが本報告である。日本国内に在住している日本人と比較したら、やはりあの広大なブラジル社会の種々の影響を彼らが受

けていることが判明したのである。

“老い”のイメージの調査結果は、結果のところで詳しく述べたように、日本的な切実さとは無縁であるようであった。彼らは日本文化と異質のカトリック文化の社会に住んではや30年も経ったけれども、今だにポルトガル語が十分に使えなくて、子供の世話になっている人々が大多数であり、病気になった時の意志の疎通について心配しているのも事実であるけれども、日本とブラジルとを比較した場合、ブラジルの広大な国土や社会生活の気楽さもまた十分に理解しているのである。

結果の所で、質問に対する回答傾向を詳細に分析報告しておいたけれども、ここで主な質問に対する回答をもう一度要約しておこう。

高齢期について考えている（Q5）人々の割合は、男性で77.3%，女性で77.8%の8割弱の人々が自分の高齢期について考えているのである。この数値は、総理府の調査による日本国内在住の50歳代の人々が78.5%であることと比較すれば、ほぼ同じ値を示しているのである。日本在住の日本人もブラジルへ移住して30年を経過した日本人も同じ程度に自分の高齢期について考えているのである。

次に高齢期のどんなことについて考えているかといえば、日系ブラジル人は、日本人と同様に、「健康」と「生活のための蓄え」とが彼らがよく考えているもっとも重要な関心事であり、かつ心配の種なのである。

次いで、高齢期という言葉から感じるイメージ（Q9）は、日系ブラジル人が“年とった時期も仕事”というイメージをもっているのに対し、日本在住日本人は“高齢期は余生”というイメージをもっている人が多いのである。両者は対照的なイメージをもっているのである。

それは、老後はどこで過ごしたいか（Q8）という質問の回答に端的に表われていると考えられる。日系人は圧倒的に老後もブラジルで過ごしたいと考えているのである。男女ともほぼ8割の人々が老後もブラジルで過ごしブラジルに骨を埋める考えである。ただし、その理由は男女によって異なっている。男性の理由は、住めば都というブラジルの風土への慣れや順応、ブラ

戦後ブラジル移民の“老い”のイメージ

ジル社会の人間関係の気楽さや良さ、を多くあげているのに対して、女性の理由は、それらをあげる人々もいるけれども、多くの人々は、日系二世のブラジル人である子供と一緒に住みたいという親族の存在をあげているのである。

戦後移住して30年経った日系ブラジル人の人々は、日本在住の日本人と比べれば、広大な国土やのんびりしたブラジルの風土の影響を色濃く受けており、たとえ言葉が不自由でもブラジル社会に考えの根本において順応し、感化されていると推察されるのである。

引用文献

- 朝日新聞 1992 平均寿命女性82.11歳,男性76.11歳 -91年の簡易生命表男女の差開き最大- 1992年6月28日(日曜日)朝刊第1面.
- 森口幸雄 1990 個人的私信 南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所長の森口教授の個人的調査に基づいている。同教授によれば、すべての少数民族を含めたブラジル全土の正確な人口調査は実施不可能とのことであった。既存の資料に基づいて推測すれば、ブラジル人の平均寿命はおよそ64歳位であろうという。
- 島 久洋 1991 ブラジル人の“老い”のイメージ 桃山学院大学・国際文化論集, 第5号, 35-60。
- 島 久洋 1992 戦後ブラジル移民の宗教意識 桃山学院大学・キリスト教論集, 第28号, 43-88。
- 週刊医学界新聞 1990 <総理府>高齢期のライフスタイルに関する世論調査より: “高齢期は余生”が40%を占める-高齢化ピークの2020年の社会には悲観的 1990年4月9日(月曜日)第1891号。
- Simone de Beauvoir 1970 *La Vieillesse* Éditions Gallimard (老い シモーヌ・ド・ボーヴォワール 朝吹三吉訳 1972 人文書院)

Images of Old Age among Japanese Emigrants to Brazil after World War II

Hisahiro SHIMA

ABSTRACT

For the purpose of the investigation, in August 1990 a study was made of 89 males and females aged 34–79 living in Bagé, Ivoti and Pôrto Alegre in the province of Rio Grande do Sul in the Federal Republic of Brazil. The investigation consisted of a questionnaire and a follow-up interview.

The questionnaire consisted of 72 items concerning health, eating habits, family relations and religious behavior, as well as old age. Both questionnaire and interview were conducted in Japanese.

The study found Japanese emigrants to Brazil after World War II to be very accepting of and positive toward old age. As for the other items, these will be dealt with in a separate paper.